



「なるほど！ 北海道のお天気」

菅井貴子 著

北海道出版社, 2009年12月
243頁, 1300円 (本体価格)
ISBN 978-4-89453-524-4

「いつか、私も大好きな北海道で働きたい」。この一言に北海道出身で気象学者の私がどれだけの共感を覚えたか知れず、書評に筆を走らせている。本書は専門家向けの本ではない。一般読者に向けて北海道の四季折々の天気現象や天気に関連する事柄を友愛に満ちた筆致で綴っている。全4章だての各章が複数のテーマで構成され、1つのテーマは見開き2頁で見事に完結する。

春はあけぼの。この情感は北海道に微塵もない。農家がアイスアルベドフィードバックの原理で畑に融雪剤を撒くのも束の間、北海道の春は一気呵成。おなじみの梅や桜の開花も、北海道でその順序が「逆転」し、5月に桜、即、梅と咲く。このような春からはじまる北海道の四季折々の風情は、第1章「お天気歳時記」に季節ごと到手際よくまとめられている。本章には北海道らしく農産物の話題も満載だ。米、とうきび(とうもろこし)、じゃがいも、大豆、昆布、サケ、カニ、シシャモ、ワイン。「天気」読者のみなさんどうぞ北海道にお越しになって、これらの美味に舌鼓を打って頂きたいところだが、無論、農業は気象の影響を強く受ける。私は子供の頃、冷害の年に大人たちが蒼い顔をして田畑に飛び出していくのを見た。冷害がオホーツク高気圧の消長に関係することくらい知っている。しかし、「稲の敵！オホーツク海高気圧」と題されて語られれば、あのときの大人たちがいまにも眼前に飛び出してきそうではないか。

「天気予報はKY (空気を読むこと)」などと例え上手な語り口は前章のまま、著者は一般読者への気象知識啓発にも心を配る。第2章は「おさえておきたいお天気基礎知識」だ。著者は数学科出身とある。その面目躍如か、文章の至る所で数字に基づいた議論を展開する。「(空気の重さは) たたみ2畳分に象が7頭」「(竜巻の) 遭遇確率は0.011%」このような話の連続に、読者の脳裏に電卓が心地よく弾かれること請け合いです。

著者の北海道を愛する気持ちは、第3章「ご当地お天気」と第4章「知っておきたいエネルギーと防災」に結実する。北海道の名だたる街々における気候の明晰な解説は気象学者としての私の魂を大いに熱くした。物事は「なぜか」あるいは「本当か」と問い、その答えに普遍性を見出せたときに科学になる、と私は信じる。「(近年の) 十勝地方は雪が多い」、なぜだ。「苫小牧は天気で自己主張」、なぜだ。「石狩平野の気候(区分)」、本当か。第3章は地域気候学研究の宝の山だ。さらに、科学はその知見が社会に還元されたときに文化に昇華する、とも私は信じる。「雪中米(のうまさ)」や「越冬キャベツの甘さ」。防災や環境問題が主題の第4章だが、私はそこに北海道文化の萌芽をみた。

なお、本書は北海道を舞台にした明晰にして滋味に富む天気解説であるから、北海道に関心がなくとも、気象に関心があれば、楽しく読み進められる。

これからは地方も積極的に文化を発信せねばならぬ。(著者の作でなくとも) 続けて各地に同様のお天気解説が出版されることを願う。さて、今日の昼休みは、「ラッキーライラック」を探しに、大通公園を散策してみようか。

(北海道大学 稲津 将)